
ストック

灰色のジアン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ストック

【Nコード】
N1600Z

【作者名】
灰色のジアン

【あらすじ】
自称シンガーソングライターの恋人が置いていった曲とクリスマス
マスを過ごす女性のお話です。

(前書き)

蒼衣さん(<http://mypage.syo-setu.com/119015/>)の恋愛短編企画「Last Love Story」投稿作品です。

凍った豆腐を投げつける

投げつける

Woo Woo

氷が溶ければミステリー

まぬけなミステリー

「変な歌」

赤信号の点滅する夜の静寂。カーステレオから流れているのは、自称シンガーソングライターの想介が作った曲だ。ミニアルバム「世間体」に収められている一曲。その名も「完全犯罪をしよう」。

こんなヘンテコな歌が売れるはずもないのに、ご飯だけはたくさん食べるので、想介はいつも貧乏だった。頭も悪いし、どんくさくって…。本当にロクでもない男。

でも他人を和ませることにかけては超一流だったと思う。少なくとも、間抜けな彼の言動に、私はいつも癒されていたのだった。

二年前、彼は突然、私の前からいなくなった。遠くへ、行ってしまった。

それからの日々に息苦しさを覚えて、ときどき空いた助手席を眺めたりして、ああ、やっぱり好きだったのだな、などと自分の情けなさに気付いた。陳腐な表現だが、心にぽっかり穴が開いてしまったような心地である。

私は大きく溜め息を吐き出し、ハンドルを切る。

「今日、聴いちやおうかなー」

彼が残していった楽曲のことだ。二人で過ごすことの叶わない何かの記念日に、あるいは、心底嫌なことがあって『限界』な日に、私はそれらの中から未聴の曲を一つ選び、聴くことにしている。ク

リスマスのイルミネーションを横目に、都会の喧噪に弄ばれた今日の私。条件は揃っていた。

想介の作る歌詞は、後期の作品に近づいても、相変わらず変なものばかりで、どんなにつらい現実もばかしくなるくらい、私に呆れ笑いをもたらす。CDの中に閉じ込められた彼の声は、いつまでも変わらない。まるで等身大の彼を呼び寄せる魔法のアイテムだ。でも、アイテムは消費される。『マッチ売りの少女』がマッチを灯すように。

もちろん、歌はマッチよりは長持ちするかもしれないけれど。大切な、ストックだ。

「私、どうなるんだろう」

ストックが尽きた後のことを考えると複雑だ。絵本の背表紙を閉じた後のように、今を終わりにして、新しい朝を生きていくのだろうか？　ずっと同じ曲の中にとどまることなんて、きっとできないけれど、違う音楽を聴く私なんて、別人と云わずに何なのだろう。

「やっぱり、好き、だったんだなあ」

私は自嘲気味に云う。気付くと涙が零れている。

「聴こう」

私は、決めた。

選択肢はなかった。寒くて、淋しくて、どうしようもなかったのだ。

底冷えするアパートの廊下を抜け、コートを着たままの姿で部屋を横切っていく。

パステルカラーに彩ったお気に入りの家具たちも、今はただの物体でしかない。

オーディオコンポの隣に重ねられた白いCDたち。太いマジックペンで書かれた「LAST LOVE STORY」に指を彷徨わせる。最後に残ったのはその一枚。

「今回ののは、ちょっとだけ頑張ったかな」

などと話していた想介のことを思い出す。いつになく誇らしげに、

真面目そうな顔。私の知らない彼の想いが、このCDには格別に詰まっているような気がした。

だから、聴いてしまうのが怖かった。本当に、全てが変わってしまふ気がして。

「でも、今夜、聴くよ」

私は自分に言い聞かせるように口にし、再生ボタンを押した。胸の奥が震える。しゃっくりの詰まったような感覚。白い息を吐き出して、想う。この曲を聴き終ったとき、私は想介の事をもっと好きになるだろう。

CDの回転が加速していく。

ほんの少しだけ待つと、ゆったりとしたアコースティックギターのイントロが私を包み込んだ。ああ、ラストソングだ……。

私はヘッドフォンに手のひらを重ねる。想介の息遣いを耳に押し付ける。ほっとする、素朴な声。

ずっと前から、思っていたんだ。

ふふ、泣かせに来てるわね。などと泣き笑いしながら、私は瞼を閉じた。

しかし次の言葉で、私は相変わらずの彼のセンスに脱帽させられるのだった。

みみたぶ、大きいよね。

私は苦情のメールを打ち始めた。灼熱の国でクリスマスを迎えた彼に宛てて。

END

（後書き）

このような小恥ずかしい作品をお読みいただき、ありがとうございました。

皆様も楽しい年末をお過ごしください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1600z/>

ストック

2011年12月5日20時09分発行